

多元的共生社会を教育から考える

講演：荻宿俊文氏

青山学院大学 社会情報学部 教授

日時：2017 年 12 月 9 日（土）13:30～16:00（受付開始 13:00～）

場所：東京大学福武ホール地下 2 階福武ラーニングシアター

プロローグ：多元的共生社会を教育から考える、その前に

■前提となる、多元的共生社会の課題

◎多元社会の不可避 共生社会の不可能

多元的共生社会とは、多元社会と共生社会が合致している言葉ですね。今日は、この多元的共生社会を教育から始めて話をしていきますが、その前に、前提となる多元的共生社会の課題を共有しておきたいと思います。

まず、多元社会は多文化社会などとも言われます。18、19 世紀までの世界は非常にシンプルで、同じ場所に同じタイプの人だけが住んでいたものが、徐々にいろいろなタイプが混ざり、その混ざり方が半端ではなくなってきたというのが、多元社会です。日本ではまだ皆同じという文化が残っていますが、今後は多国籍化、格差社会が進み、多元社会となることは避けようがありません。

多元社会では、皆の当たり前が違うのが当たり前。もちろん、皆が仲良くしたほうがいいよねという話になるのですが、そこがなかなかうまくいかない。多元社会はもはや不可避のだけれど、一方で、共生社会ももう不可能だという認識が世界にはあるのです。いろいろな人が混ざりあう社会になることは不可避だけれど、共生社会のうまく方法がなかなか見つからないという現実。これが前提となります。

◎どんな中身を、どのようにお話ししようか

こうした多元的共生社会の課題を前提に、「現状として捉えていること」「教育の歴史と現状」「過疎地小規模校教育支援の現状」「教育と『時間』という尺度の関わり」をテーマに話をしていきます。その際、テレビ番組などの映像を資料としてご紹介しながら、「あれもあるし、これもある」というような概論的な話としてお伝えしていければと思っています。では、はじめましょう。

多元社会の不可避、共生社会の不可能の 現状として捉えていること

■現状：多文化主義の挫折

◎多文化主義から社会の統合への転換

まずは、映像を見てください。

【資料映像】

- ・ 民族・人種の多様性を尊重し、すべての人が平等に社会参画する理想
- ・ 社会が分断するという現実、広がる不寛容
- ・ イギリス、ドイツが多文化主義政策の挫折を表明
- ・ 多文化主義から社会の統合への転換
- ・ 国民として移民を統合することを目的としたテスト「ライフ・イン・ザ UK」の導入

多文化は共生できるという理想をEUとして目指していたのが、移民の想定以上の増加によってシステム不全を起こし、イギリス・ドイツが理想を放棄したということです。私たちは、理想は大切だとか、現実を見ろとか、簡単にいうところがあります。私は、どちらかの立場に立つのではなく、二律のなかで行ったり来たりしていくのが必要だと考えています。多文化主義から転換したイギリスの映像を見ていただきましたが、その決断を悪いと言うのではなく、転換せざるを得なかったという現実を知る意味があるということです。知って考える。知らずに悩むのではなく、知って考える機会を提供したいということです。

■現状：自己責任の増大

◎情報社会が個人の個別化を進展させる

多元社会が不可避であり、共生社会が不可能であるとしたときのひとつの課題が、情報社会であることです。情報社会は、個人の個別化を進展させるものです。個人が個別化して、さまざまなサービスを個人で受けられるようになると、そのプロセスにおいて個人が判断することが求められる、つまり、自己責任が大きくなっていくということ。例えば、「個人情報をお預かりすることで、適切なサービスを提供します」という企業のアナウンスは珍しくなくなっていますよね。個人情報を渡すかどうかを自分で判断しなくてはならないし、そもそも個人情報とは何かを知らないといけないということにもなる。その判断が個人に課せられるわけです。

◎働くことに対する自己責任

もうひとつが、非正規雇用の問題です。すでに非正規雇用の方が4割近くまで増えているという現実があります。そこにあるのが、働くことに対する自己責任。安定した雇用というものは、本来は正規非正規に関わらず、同様に語られるべきですけど、やはりどうしても非正規雇用の方のほうが自己責任の割合が高くなっています。

さらに、労働紛争の種類が変わってきたという面もあります。かつては労働組合と企業が争う「集団的労働紛争」がメインだったものが、1990年代半ば以降、労働者個人と企業が争う「個別労働関係紛争」が増加してきたといえます。個人で賃金不払いや解雇をめぐる紛争を起こすケースが増えていて、これもまた自己責任といえます。

情報化社会では個人でサービスを受けられる便利な一面がありますが、もはや便利という言葉だけでは片づけられない問題として、個人請負の問題も起きてきています。

【資料映像】

- ・ 個人請負は歩合制で労働制約が少ない労働契約
- ・ フリーの IT 技術者やコンサルタントから、サービス業にまで拡大
- ・ 担い手の多くが若者で、すでに従事者は 161 万人に
- ・ 報酬や労働環境をめぐるトラブル増加

◎自己責任は「自由な人が持てる特権」

一方で、自由があるからこそその自己責任、という考えもあります。自己責任を否定することは、自由を持たずに他人のいいなりになることを意味するというわけですね。

今回は、こうしたひとつひとつの課題や論調に関してコメントするよりも、自己責任という言葉がいろいろな意味に使われているという事例としてご紹介しています。こうした問題や考えが次々と生まれている中で、知って考えるということが必要になってくるというのが私の考えです。同時に、どれだけ知るアンテナを持っているかを問われてもいる、ということです。

◎責任にまつわる、ひとつのアプローチ

厳密にいうと、自己責任からは少し離れるかもしれませんが、責任を問われるという課題を解決したアプローチとして、Sorry 法をご紹介します。

【映像資料】

- ・ 訴訟大国アメリカで生まれた Sorry 法
- ・ 1986 年にマサチューセッツ州で制定され、他州にも広まる
- ・ 謝罪が裁判で不利にならないという法律
- ・ 医療過誤の訴訟件数が、16～18%減に

つまり Sorry 法以前の社会では、法律的に裁判で負けてしまうがために、謝りたくても謝れなかったということです。責任を問わないことが、社会的な損失を減らすことにつながる。こういうアプローチもあるのです。

■現状：少数派が自分を語り始める

◎米タイム誌が「今年の人」に「沈黙を破った人たち」を選出

多元的共生社会においては、いわゆるマイノリティ、少数派が声を上げることが増えてきます。直近ではアメリカのタイム誌が、毎年恒例の「パーソン・オブ・ザ・イヤー（今年の人）」に「沈黙を破った人たち」を選んだということがニュースになりました。沈黙を破った人とは、セクハラ告発者たちですね。これまで表に出てこなかったような人たちが自身を語り始めること、これが評価されるようになってきたということです。

◎東田直樹さんを知っていますか

東田直樹さんは自閉症の作家です。自閉症である自分が世界をどう見ているか、どんなことを考えているかを本にされ、世界中に翻訳されました。

【映像資料】

- ・『自閉症の僕が飛びはねる理由』の著者、東田直樹さん
- ・世界 30 か国以上に翻訳され、これまで闇に包まれていた自閉症の世界を明らかに

■〇〇から〇〇へではなく、〇〇も〇〇である

◎多様で複雑化する社会に向かって

重要なことは、ある事柄を悪いと考えたり、良いと考えたりする際の前提条件を、自分がどう持っているのか知ることです。

どうしてもそう思わざるを得ないのは、学習指導要領が変わるたびに「〇〇から〇〇へ」という説明がされるから。ゆとり教育からの転換は顕著でしたし、今、議論をよんでいる「総合」の時間もそう。各教科を横串で学ぶ、ファンクラブがあったら入りたいと思うくらい良い取り組みだと思うんですけど、総合の時間はいらぬという声は今では大きいわけです。ただ、確実に面白くやっている学校もあって、そうすると「〇〇も〇〇も」という状態になっていくんですね。良い悪いではなく、多様で複雑になっていくということです。

多様で複雑な世界を私自身がまだイメージしきれてはいないんですが、そう言わざるを得ない状況になっていくのだろうとは思っています。この感覚は、人生が 100 年時代になったときに、自分の親の年齢を超えた後の自分が想像できないというのと同じ。たぶんそうなるのだろうと思いつつ、一步一步確かめながら生きていくほかないということなんです。そのためにもアンテナが必要で、ひとりでアンテナをはるよりも、個々の違うアンテナを共有しながら、協働という形で進んでいけたらいいと思うのです。

多元社会の不可避、共生社会の不可能につながる 教育の歴史と現状

■教育の歴史

◎教育による平和 コメニウスの世界図絵

現在の教育のもとをつくったのは、コメニウスだといわれています。1592年に生まれて1670年に亡くなった大昔の人ですが、現在の学校教育のしくみを構想したすごい人です。同一年齢・同時入学・同一学年・同一内容・同時卒業を考えて、世界で初めて絵入り教科書をつくったという。すごくないですか。教科書のとくにすごいところが、絵の下に3つの言語で説明が書かれていること。コメニウスは、同じ内容をそれぞれの言語で勉強して共通の知識を持ったら、戦争を回避できるための共通言語が増えるだろうと考えたわけです。世界の平和のために教育があるということです。

◎教育が必要な人間 ルソーのエミール

近代の教育論でもっとも有名なのは、ルソーです。ルソーの『エミール』という本。よく誤解されるのですが、ルソーは単純に「自然へ帰れ」といっているわけではありません。

【映像資料】

- ・「自然に帰れ」という標語で知られているが、誤解をされている
- ・自然に放置すればもっと悪くなるので、文明のなかで人間を教育する必要がある
- ・教育の基本は3つ。自然の教育。人間の教育、事物の教育
- ・まずは自然人として育て、そのうえで15歳を超えてから社会人に育てる
- ・自然人（自分のため）と社会人（皆のため）を矛盾させない

要するに、自分のことも主張するし、皆のためも大事だと。滅私奉公ではだめだということなんです。現代のコンセプトとして十分に通用するものです。

■教育の現状

◎大学の無償化は何を生み出す

多元的共生社会の教育という文脈のなかで、大学の機能についてもいくつか語られているんですね。とくに最近では、政策として無償化が打ち出されてきたので、少しこの話にもお付き合いください。まずは、大学の進学率推移です。右肩上がりに上って行って、現在は52%になっています。

◎教育劣位国家

進学率は5割を超えているにも関わらず、日本は教育劣位国家であると言われていました。

【映像資料】

- ・医療、介護と比較して、教育（特に高等教育）に対する資金配分の優先順位が低い日本

◎授業料と学生支援の国際比較

それを裏付けるのが、授業料の高さと、学生支援体制の低さにあります。

【映像資料】

- ・授業料と学生支援体制の高低で4つのタイプに分類すると、日本は高授業料・低支援にプロット
- ・経済的な理由から、学生自身がローンを組み、卒業後すぐ返済が求められる現実

◎教育の量的拡大と質的変容

マーチン・トロウが提唱した高等教育の発展段階説によると、大学在学者の量が拡大することで、高等教育の質が変わってくるといわれています。

【映像資料】

- ・マーチン・トロウの高等教育の発展段階説。「エリート型」→「マス型」→「ユニバーサル型」
- ・段階によって、高等教育が特徴的に変化していく

- ・量的拡大が質的変容をもたらす

エリートのものだった大学が、一般多数を相手にしたものになり、さらに今はあらゆる人を対象としたものへ。大学進学率が50%を超えた今はまさに、ユニバーサル型への移行期にあります。そこでは多様な就学形態が生まれ、社会人の再入学なども増えてくる。ですから今後は、履修証明書などの制度も手厚くなるでしょうし、さまざまなバックボーンを持った人たちの連携も生まれてくるでしょう。そうやって大学が、多様な人たちにとってのチャンスメイクの場になるのです。

◎正の外部性

経済の「正の外部性」という考え方で、大学無償化を説明することもできます。

【映像資料】

- ・高等教育に税金を使う意味は、社会にどれだけのメリットがあるか
- ・大卒者は高卒者に比べ、生涯で1500万円多く所得税を払っている
- ・iPS細胞に代表されるように、大学研究がイノベーションにつながる
- ・お金を払っている人以外の人々が恩恵を受けるのが「正の外部性」
- ・国が高等教育進学を援助することで、最終的には本人以外の多くの人々が恩恵を受ける

恩恵を受ける本人のことだけを考えると、こうした「正の外部性」みたいなものに気づくことができません。

さらにいえば、学部、大学院というメインストリート以外の人たちが大学にくることで、大学が活性化していくということも考えたいのです。履修制度の整備なども必要でしょうが、そうやって集まった多様な人たちから生まれるものがあると思うのです。多様な人が集まることが価値であり、大学という場を使うプレーヤーを増やしていくことが大事なのです。

◎社会に問うことを建前として、社会の現実に位置づくことを本音とする＝サトリ世代？

ただ一方で、そんな意識高く生きていかなくていいじゃないか、という学生に多く出会うのも事実です。社会は変革可能なものではないし、社会のどこかにポジションを確保できればいいですという。ゆとりではなく、サトリ世代というらしいんですけど。ここで、ある学園ドラマの一場面、とある中堅私立高校の校長が生徒に向かって話をしている場面をご覧ください。

【映像資料】

- ・大学を出たほうが就職に有利といった意識で大学に進学する学生がいる
- ・この学校から、就職に有利な大学への進学者は少ない
- ・学歴では厳しいから、就職では人間力で勝負しなくてはならない
- ・だからこそ大学では本音でぶつかって、人間力を磨いてほしい

ドラマの一場面を切り取ることに疑問はありますが、ある意味、現実の教育現場で語られていることでもあります。多元社会は不可避で、共生社会は不可能であるという文脈のなかで考えると、「じゃあ、私はどこかにポジショニングできれば、もうそれでいいです」と言わせていいのか。そこに違和感を持たなくていいのか。私自身、

結論は見いだせていません。ただこのドラマを見て、「本音を語る」ことについて考えなくなったということですね。そのあたりのモヤモヤを残したまま、次にいきます。

多元社会の不可避 共生社会の不可能と 過疎地小規模校教育支援の現状

■社会の課題を解決する学校

◎ALE (Authentic Learning Environments) 芸術表現体験活動と省察活動による授業デザインの提案
ここからは、今、私が実際に取り組んでいる活動についてご紹介します。ALEプログラムというもので、芸術表現体験活動と省察活動による授業デザインを提案しています。簡単に言うと、芸術表現活動、アート系のワークショップをやって振り返りをすると、子供たちにとって意味があるということ。

まずアートには「するアート＝表現する」「見るアート＝鑑賞する」「使うアート＝活用する」があり、アートそのものの教育と、アートを“手段”として使うという枠組みをつくりました。アートを活用することが、資質能力の発見定着につながると宣言して、新潟や長野、鳥取の小さな市町村の学校をターゲットに実施しています。なぜ小さい市町村かというと、教育長と校長の合意さえあればスタートできるから。人間関係が安定しているというのもひとつの理由です。

発見定着できる資質能力としては、以下を挙げています。「協働で新しい価値を生成することができる資質能力」「自他の違いを理解し、活かせる資質能力」「学習習慣を自ら育てていく資質能力」。いわゆるカリキュラム、教科別の知識獲得といった目的ではなく、コミュニケーション力やセルフコントロール等、汎用的な能力の育成を目的としています。

◎ALE のコンセプトで鳥取県鹿野義務教育学校の学校特設科目が生まれる

鳥取県で鹿野町では、学校特設科目とする提案が採用されて、来年4月からは活動ではなく“科目”としてスタートします。何が言いたいかというと、教育という大きなものであっても、変えられるということ。私たちが教育というものをとらえるときに、受動的に考えるのか、次の形をつくっていけると考えるのかで、大きく変わってくるのです。知人の平田オリザなども、兵庫県の豊岡市で活動を始めていて、お互いのコンセプトをシェアしようという流れにもなっています。全国同時多発で小さな動きは起きていて、そのネットワークのひとりとして、答えをつくり続けていきたいと考えています。

◎鳥取県：鳥の劇場との協働。トリジユクプロジェクト

ALEプログラムと一緒に組んでいるのが、鳥取県の「鳥の劇場」という団体です。鹿野町の廃校舎を劇場に変えて活動しているNPOで、県内のいろいろな学校で演劇ワークショップを行っています。2017年12月16日には、渋谷のヒカリエでもワークショップをするそうです。つまり、小さな動きが、少しずつうねりになり始めているということです。

ワークショップ自体は、鳥の劇場のアーティストが行っていますが、授業での省察は先生に担当してもらっています。省察方法はこちらが提案し、子供たちの発話データから、なにか変化が起きていないかというようなことも研究しています。会話のなかに見える協働性といったことですね。もちろん、すぐに劇的な変化がうまれるわけではないんです。そこが苦しいところではあるのですが、今効果がなければ効果がないとするのではなく、時間をかけることが重要と強く思っています。

◎活動の論拠として～楽観脳と悲観脳

活動の論拠として使えるのではないかと、急速に広がってきた脳科学を取り入れています。

【映像資料】

- ・ ポジティブで前向きな心の動きを生む楽観脳と、ネガティブで悲観的な心の動きを生む悲観脳
- ・ 思い込みや願望、恐怖心のために、同じ事象のことがまったく違うようにみえる
- ・ 周囲のことをどう認知するか脳の癖が、認知バイアス
- ・ 主な認知バイアスは4つ。帰属のあやまり、注意のバイアス、解釈のバイアス、記憶のバイアス

現在は、なにごとにもデータが求められる時代です。例えば、九九などの学力は短期間で上げることができるんですね。テスト結果をデータとして出すことも可能。こうしたことに慣れていく人からすると、私たちの取り組みは理解しにくいところがあります。私たちが伸ばそうとしている資質能力は簡単には獲得できず、長い時間をかけていくものですし、どうデータを採ればいいのか。その可能性のひとつとして、脳科学が使えるのではないかと考えています。

■「教育から考える」のまとめ

◎利他性は埋め込まれている

そもそも人間には「利他性」が埋め込まれていると私は考えています。人間は弱い生物で、共同体をつくることで生き延びてきた。共同的でないと生きていけないわけですから、「他人にとって必要な自分であることが大事だと考える」ということが埋め込まれているんです。

◎社会と個人

教育は社会と個人をつないでいくものです。社会に個人というものがどのように位置づくのか、そもそもどのような社会なのかという捉え方が違ってしまうと、社会を考えない個人となる。それなりに幸せであれば、あとは他人任せ、「意識高くやったところで無駄でしょ」となってしまうということです。

◎教育には時間をかける必要がある

はっきりと言いたいことは、教育には時間をかける必要があるということ。先ほどの ALE プログラムには 15 年かけると私は宣言しています。こども園＋小学校＋中学校＋高校の 15 か年計画です。共同体のなかで必要とされる力や、協働する力といったような資質能力の育成を、時間をかけながら、学校が担ってもいいじゃないかと私は考えています。

多元社会の不可避 共生社会の不可能につながる 教育と「時間」という尺度の関わり

■近代社会の時間

◎関係性的な時間 円環的な時間

教育と時間とを考える際に、どうしてもご紹介したい本があります。かなり以前に出会った本なのですが、おすすめの本を聞かれると必ずリストに入れている一冊です。特に今回は、この本の第十章「近代社会の時間」をご紹介します。

【資料】

『時間についての十二章 一哲学における時間の問題一』内山節著 岩波書店

「近代的個人は、一面では独立し、自律した自由な個人であった。ところがもうひとつの面においては、すべての事柄を自分の責任で判断し、たった一人の力で社会に立ち向かわなければならない裸の個人でもあったのである。」（237 P 4～6 行目）

文脈としては、ワイマール憲法を掲げるドイツでファシズムが台頭していく時代を考察して書かれているのですが、今まさに起きていることだと驚きませんか。情報化社会においては、個人としての自律性は高くなっている。その一方では自己責任が問われ、たったひとりで社会に立ち向かう必要が出てくると。人間は昔から変わっていないんです。自由になって、ひとりで何でもやりたいと望み、いざひとりになると、さみしくて、不安で誰かとつながりたくなる。

多元的共生社会のテーマで言えば、皆が違うという当たり前があって、離れていたいんだけど、関わらずにはいられないということ。異なるタイプの人同士で一緒にやろうと思っても、なんでこいつらと…それぞれが思ってしまうということ。

そこにあるのは、関係性的な時間です。職人のように自分の働いている時間は自分のコントロール下にあるというような主体としての時間がある一方で、共同体が農耕的な作業を共有しながら関係性を育んでいくような関係性的な時間もまた存在します。農耕的な作業でいえば、季節とともに巡る円環的な時間もそこにはある。

今回、何かを断定的に言うことはやめてきたのですが、これだけは言えます。何もかもひとりでできるような自分を目指すことはやめたほうがいい。誰かと何かを一緒に行う関係性的な時間を選択したほうがいい。できるならば、さまざまなコミュニティに参加することを自分に課したほうがいい。

自律性とは、ひとりで完結するという事ではないのです。いざというときに頼れる人がたくさんあるということ。「自律＝ひとりでなんでもできる」と読むことはやめたほうがいい。それは無理だからです。頼れる人をつくるための手段が、一緒に何かモノや事柄をつくるということだと思っています。

なかなか議論しきれていない感はありますが、今回はここまで。今回はまだどこにも話していないようなことを概論的にお伝えしました。知って考える、その機会となればと思います。

【質疑応答】

Q：円環的な時間の「円環的」の具体的な意味は？

自然の摂理に応じた時間で、そのなかに自分もいるということ。植物のタネに呪文をかけたら、あっという間に芽が出るとかいうことはないわけで、それこそが自然の摂理に応じた時間。円環的な時間もあれば、直線的な時間もあるのですが、直線的なものはゴールしたら終わり、また次のゴールを目指すことになる。直線的な感覚だと、時間は圧縮できるものになります。生産性を考えると分かりやすいかと思いますが、1時間かかることを30分でやるというような、時間の圧縮が可能になるのです。ところが、円環的な時間は圧縮できない。関係性的な時間は圧縮ができないのです。

Q：教育における「評価」の取り方は？

九九をどれだけ覚えたかというような知識を測るのには、テストが一番いい。でも、それだけが評価なのかという問題があります。評価には、他人からされる評価と自分がする評価があり、これまでのような権威者による評価ではなく、「自己評価」を考えていく必要があると私は考えています。しかも書き換え可能であることが重要で、書き換え可能な自己評価を確立することが私自身のテーマでもあります。

Q：イギリスの教養試験「ライフ・イン・ザ UK」導入は良いと思っている？

長期的に考えると、私個人はなかなか良いとは思えないし、実際に導入した人もベストだとは思っていないんだろうけど、現状としてやらざるを得ないのだろうなと思っています。2014年にドイツを訪問したときに、移民の子供が多く通う学校を視察しましたが、先生たちは本当に頑張っていた。ただ移民の増え方が想定以上で、対応に限界があるということなのです。

Q：多元社会において相互理解は不可能という前提で、それでも向かい合おうとするのが共生社会？

相互理解は不可能だという前提に立つか、限定的には可能だという立場をとるかで変わってきます。宗教的問題でいえば、理解できるけど信仰はしない、ただ風俗は許容範囲に入ってくるというようなことがある。例えば、イスラム教徒が食べられない食材を除去して給食をつくる、というようなことは制度として可能になっています。相互理解は不可能ということを前提にすると、共生社会と自己矛盾を起こす。人間は、コミュニティをつくりたいという本能をもっている。それをないことにはできないし、かといって、共生社会は不可能とすぐにあきらめるべきなのか。いずれにしろ、考えることをやめてはいけないということです。

Q：新しいコミュニティに入ろうと思ったときに、最初に何をします？

観察します。

Q：周りとの関係性はどうやったら広がるか？

関係のある人の「数」というよりは「時間」に着目してほしいですね。関係性はすぐにできるものではなくて、じわりじわりと時間をかけないと見えないもの。やはりどこかで時間をかける尺度を持つことが必要なんじゃないかと考えています。ALEプログラムも15年かける宣言をしていますが、15年という時間をかけることで生ま

れるものがあるということは確信できる。関係性をどう広げるかということより、どう関係性を味わうかということのことです。

Q：多元的社会で、他人をどう理解したらよいか？

理解とはなにかをまず考えてみてください。その人が何を好きか、を知ることが理解なのか。自分にとって理解するとはどういうことなのかを考えると、分かってくると思います。

Q：時間がかかるプロジェクトを続ける根拠として、「認知バイアス」をどう活かせるのか？

ポジティブな言葉かけに、ポジティブな気持ちが育つ。ポジティブな気持ちを人にギフトする関係を再生産したいのです。ワークショップ通じて、他者を認め合う関係を続けていくと、その関係性を維持したいと思うようになると考えています。そうやって再生産して生まれた豊かなコミュニティと、殺伐としたコミュニティの違いを、量的に数値化して証明しろと要請されるのなら、脳の中がどう変化しているのかを見せるために脳科学を利用したいと考えています。

Q：共生社会は不可能。これからの社会はどこへ？

ヒューマンネットワークが、セーフティネットになると思っています。ヒューマンネットワークは自分で耕せるし、飛び込めば新しいものが生まれる。出会いを拒否しなければ、どこかのネットワークには入れる。また社会の制度、例えばEUという国の制度・枠組がこれから変わっていくとしても、共通の趣味を持つ外国の友人との関係は変わらないということもいえます。